主催者あいさつ

開会の辞より

我が国の提唱で、2005年に始まった「国連持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」は2014年に最終年を迎え、11月には愛知県名古屋市、そして岡山市において、「ESD に関するユネスコ世界会議」が開催されます。
愛知県名古屋市での世界会議では、ユネスコ加盟国195か国をはじめとする、国内外の閣僚、政府関係者、NGOなど1000名以上の参加が見込まれます。また、岡山市では、ユネスコスクール世界大会、ユース・コンファレンス、持続可能な開発のための教育に関する拠点の会議といった3つのプログラムに、国内外の高校生、青年、研究者など、約1000名のステークホルダーが参加する大規模な国際会議になります。この3つのステークホルダー会議の成果は名古屋の会議にも報告され、世界の人々と共有されるものとなります。文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会としては、この世界会議を通じ、2014年以降において、国内外におけるESDを更に推進させる必要があると考えており、現在、ユネスコ事務局と、鋭意作業を進めているところです。

また国内では、ユネスコスクールをESDの推進拠点として位置づけ、その普及に努めているところであり、現在、そのユネスコスクールの数は615校にまで上っています（2013年10月18日時点）。これらのESD の実践校であるユネスコスクールからは、児童生徒が世界的な課題から身近な問題を自ら考え主体的に行動するようになったと、ESD の教育効果に関する御報告もいただいているところです。加えて、NPOや民間企業、あるいは市民の皆様など多様な方々がそれぞれの立場でESDに取り組むことによって、社会全体で持続可能な社会の担い手作りに取り組んでいくことが大変重要であると考えております。

2014年の「ESD に関するユネスコ世界会議」を成功させるためにも、市民、行政、NPO、企業、地域社会の協働は不可欠であり、この「ESDの10年・地球市民会議2013」を契機に、日本全体で機運を高めて参りたいと思います。今度とも皆様の御協力をお願い致します。

「ESDの10年・地球市民会議2013」
主催者担当：文部科学省国際統括官室
事業事務局連絡先：「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム
東京都中野区中野2-3-13
㈱コミュニケーション・デザイニング研究所　内
TEL　03-3229-1041　FAX　03-3229-1044
E-mail　desd@desd.jp　（担当：福井聡子）

本会議の詳細はホームページで御覧いただけます。　www.desd.jp
※本資料内の肩書等の情報は開催日時点のものを使用しています。

ESDの10年・地球市民会議2013

「ESDの10年・地球市民会議」はESDにたずさわる多彩なプレーヤーが一堂に会し、日本そして世界の最新動向を共有。ESDをもっと広めるための課題について参加型の討議を行いながら、2014年の「国連ESDの10年（DESD）」最終年をオール・ジャパンで盛り上げることを目指して2009年から開催されてきたシンポジウムです。
2013年はDESD最終年を目前に控えたタイミングで、ユネスコと日本政府の共催で開催される「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」の公式会合開催都市のひとつである岡山市で実施されました。
ゲストだけでなく会場の参加者の皆様と共に、この10年間で見えてきた課題や成果、そして2015年以降の日本そして世界でESDが更にその役割を果たすために必要なこととは何か、様々な立場からの御意見が飛び交う機会となりました。本資料ではその内容をコンパクトにまとめて御紹介します。

開催日　2013年10月18日（金）
会　場　岡山コンベンションセンター
　　2階レセプションホール、4階会議室
主　催　文部科学省、日本ユネスコ国内委員会
　　（平成25年度日本/ユネスコパートナーシップ事業）
共　催　「ESDの10年·世界の祭典」推進フォーラム
　　認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）
　　岡山市
後　援　外務省
　　環境省
　　公益財団法人ユネスコ·アジア文化センター（ACCU）
　　日本商工会議所

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization
Education for Sustainable Development 2014
World Conference, Aichi-Nagoya, 10-12 November
Stakeholder Meetings, Okayama, 4-8 November

基調報告から

「ESDに関するユネスコ世界会議」開催に向けたユネスコの取組の現状報告

岩本渉
文部科学省国際統括官付国際交渉分析官

2014年の「ESDに関するユネスコ世界会議」が目指すのは、「国連ESDの10年」の10年間で何を達成できどんな教訓が得られたのかについて、日本のみならず世界のグッド・プラクティスから勉強し合うこと。そしてこれらを質の高い教育として、ESDの専門家ではなくても通常の教育活動にどういうふうに役立てていくのかを確認すること。更にエネルギー問題や、気候変動、生物多様性、防災といったような様々な「サステナビリティ」に関するテーマについて、ESDを通じて更にどのように取り組めるのかを議論することです。これらも踏まえながら2015年以降の世界的なESD普及に関するアジェンダを作成していこうと考えています。
このアジェンダとしてユネスコ事務局が考える成果の一つは、「宣言」。世界各国から集まった専門家たちと相談しながらユネスコが事前に草案を作り、11月の世界会議での議論をふまえて内容が固められる予定です。この宣言の構成要素としては、各国政府の責任ある参画を確認することや、質の高い教育の不可分の要素としてのESDを強化するといったことが考えられます。
更にもう一つの成果としてESDに関する「グローバルアクションプログラム」を考えています。これは優先行動分野として：政策的な支援／包括型のアプローチ（ホールインスティテューションアプローチ）／教育者／ユース／地域コミュニティの5つを定め、世界が2015年以降にESDをどのように進めていかなければいけないかということを考えます。これに対してステークホルダーからの「コミットメント」として、加盟国、市民社会組織、学校・教育機関等からの「ポスト2014」のための具体的な計画を募集して深めていこうと考えています。これによって教育・学習を再方向付けし、持続可能な開発に貢献するような能力を向上すること、そしてユネスコや教育関係者だけではなく、持続可能な開発を促進する全ての関連アジェンダやプログラム、活動において、教育・学習の役割を強化することが目的なのです。
こういった成果に向かって、既にユネスコ総会等で議論や検討が始まっています。11月のユネスコ世界会議では、このグローバルアクションプログラムを「ロードマップ」のような形で解説する指針のような、より詳細な内容の発表を行い議論を経て、同年の国連総会でこの内容が承認されることを目指します。
一方日本国内では「若者」と「企業」のユネスコ活動への積極的な参加を促進するため、そして「学校教育、社会教育等を通じたESDの一層の推進」のために、地域における多種多様なプレーヤーが参画し、学校同士の交流も実現しながら、ESDを「面」で普及・連携・促進するようなコンソーシアムを構成するための検討を行っています。
2014年の世界会議をゴールではなく新たな出発点とし、これを契機に更にESD を日本あるいは世界全体で発展させて教育の流れを変えていくことが我々の目指す所なのです。

世界におけるDESDの振り返り・評価と「ESDに関するユネスコ世界会議」への期待

ハンス・ファン・ヒンケル
ユトレヒト大学名誉教授（地球科学学科）、元国連大学学長

持続可能な開発（SD）というのは「歩み寄り」です。持続可能性は開発を通して行い、達成することができますがまた逆に、持続可能性なしに開発はできません。持続可能性について語るとき、この両極のトレードオフを考えなければいけません。エネルギー問題など、我々が何を選択していくかそのチョイスが非常に難しい選択になってきます。ですからSDには「知恵」も必要なのです。そして持続可能な開発は、環境だけではなく人間、まさに我々の社会に関するものなのだということをまず申し上げたいと思います。
「ESDの10年」について、2014年は始まりでも終わりでもありません。我々の将来のマイルストーン（節目）なのです。これまでにたくさんの国際会議や活動が行われてきましたが、これら全ては将来を持続するためにどうしていくか、またどうやって教育がその役割を担うかについて考える機会だったのです。この「ESDの10年」で我々の活動は強化されてきました。その成果を今後の活動の前提として取り込むべきです。持続可能な開発（SD）の課題に関する役立つ情報はますます増えており、優れた学習教材が手に入ります。また最新の情報通信技術（ICT）は、革新的な学習と情報戦略に関する新たな機会を多くもたらします。社会の知識集約や、グローバルとローカルの統合が進むことで、面白い学習教材を開発するための機会が更にたくさん生まれ、しかもこうした学習教材は世界中で共有することができるのです。
MDGs（ミレニアム開発目標）は、社会への貢献や開発の貢献が半減した90年代、それに対して我々がどう対応していくかという所から生まれましたが、そこから更に「持続可能性」という目標について考えるようになりました。SDの問題は先進国にとっても途上国にとっても全ての国の問題です。2012年にはリオ+20が行われ多くの誇るべき実績が生まれましたが、まだまだ達成できていない。やるべきことがあります。様々な意見の相違はありながら、世界的な合意に向けて我々は前進していくのです。2015年以降はミレニアム開発目標と持続開発の目標を一緒にあわせるような大きなアクションが必要だと思います。またこういった問題に関心を示さない人々をどう巻き込むかは依然として難しい問題ですが、教育がそれを確実にするのです。大学をはじめとする高等教育機関ももっといろいろなことができるでしょう。
ESDにおける重要な観点は、環境や開発は場所および時期による特殊性を持つという点です。複雑性、現実を理解すること。人と連携すること、地域、地元に根ざしたアプローチであること、新しい教科で教員を用いて教えるのでなく、既存のものから構築していくことも必要になってきます。健全なトレードオフを探し求めることも必要です。
ポスト2014年のESDで重要な点は、SDに向けて人々や知識の動員を更に促進し、強化する必要があるということです。SDは依然として、あらゆる防災や、救援・援助能力の向上、人々のレジリエンス（回復力）強化のための主な必須条件です。新たな関連情報を得るため・適切な政策やコミュニケーション戦略を開発するために、ESDに関する地域拠点（RCE）の活動範囲は教育にとどまらず、実地調査などの活動も行うべきです。RCEが誕生して以来開発してきたあらゆるプロジェクトから得た必要な知識を構造化し、これを近くのおよび遠くのRCE同士で共有し、ESDのためのグローバルな学習空間を構築することも重要です。RCEのすべてのプログラムやプロジェクトをもとに、世界のあらゆる場所で重要となる中核的なカリキュラムを開発するとともに、特定の状況で重要となる特殊な課題や事柄を明確にすることも可能でしょう。
我々の手中にある教育というパワーソースを強化していこうではありませんか。

ESD先進国ドイツにおけるDESDの振り返り・評価と「ESDに関するユネスコ世界会議」への期待

ゲオルク・ミュラー・クリスト
ブレーメン大学教授（経済学科、サステイナブル・マネジメント専攻）

ドイツにおけるESDの取組において「国連ESDの10年」国内実施委員会や円卓会議、作業部会といった全体構造の中で、政治と市民社会の連携が非常にうまくいっています。また、戦略目標を明確にしながら教育の方向性を明確にし、ESDが一般の人にとって目に見えるものにしていくための「ナショナルアクションプラン」、優れた実践を顕彰し持続可能な将来のための活動を応援する「10年プログラム」、ESDに関する活動を告知し多くの人に関わってもらうための入口となっているWebポータルサイトの開設など、実行プロセスにおいても成功事例が生まれました。
今後こういった取組を拡大し前進していくため、現在トップダウンで「10年プログラム」の評価をしています。ユネスコ国内委員会としては、2014年にドイツ全国大会を開こうと考えています。マルチステークホルダーのプラットフォームを用意し、ドイツにどういう活動があるのか、その成功事例・失敗事例をもとに、将来どのような形でドイツでの活動を世界にも展開していけるのか、その実施手法を検討します。これらの活動全体の目標は全ての実践者たちに、今の活動をもっと続けてもらうことです。「プロジェクトを構造へ」というモットーの下、ESD の能力開発というのも2014年の大きな課題です。
ユネスコ世界会議が2014年に日本で開催されるにあたり私が強調したいのは、国連ESDの10年に続けて非常に強いグローバルなアクションが必要であること。各地の実践者によるボトムアップの活動を更に強化するには政治的・資金的なサポートも必要であること。そしてトップダウンのプロセスも活用してESD に関するルールを決めて行くべきだということです。現代の社会における開発はボトムアップ、トップダウンの両建てでやっていく必要があるということをハイライトするべきだと考えます。ESDに関わる人たちによるしっかりとしたネットワークで、来年そしてそれ以降に向けて取組を進めていきたいと思います。

主催者・共催者あいさつから

大森雅夫
岡山市長

2014年、岡山市では3つのステークホルダー会議と、「ESD 推進のための公民館-CLC国際会議」が開催されます。こうした中、市民、企業、教育機関、行政と幅広い分野でESDに携わる皆様が一堂に会してESDの最新動向に関する情報共有を図り、持続可能な社会作りに向けて議論を深める「ESD の10年・地球市民会議」そして「ESDテーマ会議2013」が開催されることは誠に意義深く、これらの会議や2014年のユネスコ世界会議はもとより、2015年以降のESD の更なる推進につながる実り多きものとなることを期待しているところです。岡山市としても今後とも世界会議の成功、更にはESD の一層の推進に向けて、全力で取り組んで参ります。私自身、約10日前に岡山市長になったばかりですが、このESDの推進に向けては今後一生懸命努力をして参りますので、よろしく御指導のほどお願い申し上げます。
岡山には岡山城、日本の三大名園といわれる後楽園、そして古代吉備国の面影を今に伝える吉備路など多くの見所に加え、温暖な気候風土に恵まれた季節のフルーツや、瀬戸内海の島々を舞台とした瀬戸内の海の幸など、人、自然、大地が生んだ特産品も豊富な土地です。瀬戸内海の島々を舞台にした現代アートの祭典、瀬戸内国際芸術祭も開催されています。この機会に是非こうした岡山の魅力を御堪能頂き、会議の成果とともに、楽しい思い出をお持ち帰りいただければ非常に有り難いと思っています。

重　政子
日本ユネスコ国内委員会委員、ESD-J代表理事、
「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム理事

「持続可能な開発のための教育の１０年」は、日本政府とNGOから共同提案され、ユネスコを主導機関として世界で推進されてきました。その集大成として「ESDに関するユネスコ世界会議」が岡山市、そして愛知県名古屋市において世界各国から沢山の参加者を集めて開催できることはとても意義深いことだと思います。
ESDの推進は学校教育のみならず、NPOや民間企業、自治体などの色々な立場の皆さま１人ひとりが市民として社会全体で、持続可能な世界の担い手づくりに取り組んでいくことが重要であると共通理解されていると思います。
持続可能な社会を構築する人材を育む為の推進は、世界会議に向けてはもとよりですが、ポスト2014のその先にむけて益々、様々な立場の皆様の役割と御尽力に対して期待が高まっております。ユネスコ日本委員会では、若者や企業の参加によるユネスコ活動の改革、促進、サステナビリティサイエンスなどもふくめ、学校教育、社会教育を通したESDの更なる推進についてとるべき方策等、議論を進めております。世界会議に向けてESDの実践者の取組がより深化すること、ESDを全く知らない一般の人々に対してもESDの概念が少しでも普及するためになお一層最大限の努力をして参ります。

ステークホルダー会合などの現状と最終年に向けた取組の紹介

DESD最終年に行われる重要関連会合や開催都市の受入準備状況について、報告が行われました。

2014年「ESDに関するユネスコ世界会議」スケジュール

	岡山市	愛知県名古屋市
10月	10月9日～11日 ESD推進のための公民館-CLC国際会議	
11月 1（土）		
2（日）		
3（月）		
4（火）	ステークホルダー会議 / 持続可能な開発のための教育に関する拠点の会議	
5（水）		
6（木）	ESDウィーク オープニング セレモニー / ユネスコスクール世界大会	
7（金）	ユース・コンファレンス	
8（土）	移動・視察等	移動・視察等
9（日）		
10（月）		閣僚級会合および全体のとりまとめ会合
11（火）		
12（水）		
13（木）		フォローアップ会合

11月6日～8日
ユネスコスクール世界大会

柴尾智子
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)
教育協力部部長

ユネスコスクール世界大会は、世界各国のユネスコスクールで行われてきたESDの実践を共有し、そして共通の未来を作るために協働して取り組むことを目指しています。ユネスコスクールは世界180カ国以上の9700に近い学校が参加する世界最大の学校ネットワークといわれますが、それを実感するようなその土地々々に応じたニーズに応えるためのユネスコスクールの実践の紹介と交流の機会となります。

スチューデントフォーラム、教員フォーラム、そしてユネスコスクール全国大会という3つの大きな部門から構成されており、スチューデントフォーラムには15歳から18歳の年齢層をターゲットとし、国外から33チーム、日本からは9チームの合計42チームによる討議が行われることになっています。これまで各国で行われてきたESDで一体そこで何を学んできたのか、それを踏まえて共通の未来をどうやってつくっていくのかといった宣言文が参加した高校生たち自身の手によって作られ、愛知県名古屋市での会議につながっていきます。最終日にはユネスコスクール全国大会が行われます。多くのステークホルダーの参加も得ながら、これまで毎年行われてきたユネスコスクール全国大会の機能も一部持ちつつ、拡大的発展的に行われることになるでしょう。2014年の世界会議は国連ESDの10年の最終年であることは間違いありませんが、それはポスト2014年の始まりであり、これまで様々な形で支えられてきたユネスコスクールが今後ESD を更に発展させ、地域にその成果を還元し、世界のユネスコスクールとネットワークを築いていく大きなステップになるものです。今後の準備過程が、そしてユネスコスクール世界大会の実施そのものが、そのようなステップフォーワードになり、将来につながっていくことを強く願っています。

10月9日～11日
ESD推進のための公民館-CLC国際会議

阿部宏史
公民館-CLC会議実行委員会運営委員長、岡山大学副学長

岡山市では2005年に国連ESDの10年が始まって以来、市民、大学、学校、行政等が連携してESDに取り組んで参りました。特に公民館活動が盛んなことから、公民館がESDの推進拠点となり、様々な切り口から地域の課題解決に取り組んでいるところです。2007年に、岡山大学とNPO法人の岡山県国際団体協議会が主催して「Komiinkanサミット in Okayama ―地域づくりとESD の推進」という国際会議を開催しましたが、その成果として、ユネスコがアジア太平洋地域の社会教育拠点として推進しているCLC（コミュニティ・ラーニング・センター）と日本の公民館が、ESDの果たすべき役割と国際連携の必要性を盛り込んだ岡山宣言を発表しました。その後、岡山におけるESD の推進では、公民館とCLCの国際交流を通じて、持続可能な社会を実現していくための自発的な学びを通じた地域づくりの重要性、そして多様な人々をつなぐ役割について共通認識を醸成してきたところです。

2014年10月に開催するESD推進に関する公民館-CLC 国際会議では、公民館やCLCの活動にESD の視点を取り入れることの意味や意義の見直し、そしてESDを通じたこれらの活動の活性化の道を探ることを目的として、様々な国におけるすぐれた実践例や、成果や課題を共有し、持続可能な社会づくりにおける公民館とCLC のビジョンについて語り合うことを目的としています。現在プログラムの概要を決定し、会議開催に向けた準備作業を進めています。ESDを中心とし、地域の様々な主体がつながり、支え合うことによって新たな関係性を創造し、持続可能な社会づくりに貢献していくという可能性を更に語り合い、深めていくことを期待しています。

11月4日～7日
持続可能な開発のための教育に関する拠点の会議

竹本和彦
国連大学高等研究所　ESDプログラムディレクター

国連大学が展開しているRCE（持続可能な開発のための教育に関する地域の拠点（Regional Centre of Expertise on Education for Sustainable Development）は、本日の基調講演者でもあるハンス・ファン・ヒンケル元学長のイニシアティブで様々な方々の協力を得て実現したもので、ESDを学校だけでなく幅広い関係者の皆さんが推進する地域の拠点を国連大学が認定するという広がりのある活動です。ESDと一言で言ってもいろいろな取組の主体がありそれぞれが連携をしていく、というのがキーワードです。

このRCEネットワークは、今では世界全体で120が認定を受けています。グローバル会合を毎年開催しており、2013年のケニア・ナイロビでの開催を受ける形で、2014年は11月4日から7日にかけて岡山で第9回目の「持続可能な開発のための教育に関する拠点の会議（グローバルRCE会議）」を開催いたします。ここで議論をしたものを、次の週に愛知県名古屋市で開催されるユネスコ世界会議でインプットしていくという考えで現在いろいろな取組を計画をしているところです。現在「グローバル・アクション・プログラム」に関してユネスコでとりまとめ作業が進んでいる訳ですが、その中にどういうコミットメントをインプットしていくかが大変重要です。今後議論を深め、より具体的な、よりダイナミックな提案をしていきたいと考えています。当然、岡山でのグローバルRCE会議において、翌週に愛知県名古屋市で開催される世界会議に向けてどういうインプットをしていくかということについても議論をしていきたいと思います。同じタイミングで岡山ではユネスコスクールやユースの会合が開催されますので、そことの交流も是非やっていきたいと思っています。

11月4日～8日
「ステークスホルダー会議」開催に向けた岡山市での受け入れ準備状況の紹介

浅井孝司
岡山市ESD世界会議推進局長

岡山で実際に開催される会議は、公民館-CLC の国際会議が10月9日から11日の開催。そしてユネスコスクール世界大会、グローバルRCE 会議、ユース・コンファレンスが11月にございます。そして11月6日に岡山市が中心になりESD ウィークのオープニングセレモニーを開催する予定です。ここでは各種ステークホルダー会議に参加する方々に一堂にお集りいただき、ESDウィークの開催を祝うことを考えています。岡山ではこれらの会議の準備の他に、ユネスコスクール世界大会に焦点を当てた準備セミナーも実施しています。ユネスコスクール世界大会は、日本では高校生を対象として行う会議ですが、この会議の運営自体を高校生に担ってもらうということで、既に2013年度は5回、準備セミナーとして、大阪と岡山の高校生たちが自ら訓練を行っています。

更に我々はこうした会議の準備とともに、一般市民の方々にESDを知っていただくということが一番重要だと考えています。あらゆる機会・ツールを使い、ESDのPR に一生懸命努めています。岡山の会議を成功させ、その成果を愛知・名古屋にもっていくということ、また岡山のRCEも頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

11月7日
ユース・コンファレンス

鈴木啓介
公益財団法人五井平和財団

本事業の目的は、まずは世界各地でESDを実践する18歳から35歳の若者が集い、それぞれの経験、知識、アイデアを共有し、学び合うことによってさらなる発展をしていくこと。次に若者ならではの革新的な取組を特に重視し、ESD の推進力として若者の行動、活動をハイライトすること。更に若者の間にESDをもっと普及し、参加を加速すること。そしてこういった若者によって2014年以降、ESD を推進するためのユースならではの提言をまとめることです。この提言は、各国政府やユネスコに対するいわゆる単純な「提案」ではなく、若者自身も提案をまとめるだけではなく主体的に活動していく宣言文のようなものをイメージしています。この宣言文は成果物として、愛知県名古屋市で開催される世界会議にユースの提言としてインプットするものに取りまとめたいと考えています。更に、参加する大勢のユースによるグッド・プラクティス集を作成し、幅広く活用していきたいとも考えています。会議自体も、従来型ではなく分科会やディスカッションを中心に構成し、参加者が主体的に参加できるインタラクティブなプログラムを予定し現在検討している最中です。

プレ会合として2014年の2月16日にESD日本ユース・コンファレンスを開催しますが、事前募集の定員に対し非常に多く御応募をいただきました。業種、年齢、分野とも非常に幅広い、そして非常に大勢の方々がESD に取組んでいることは大変嬉しいニュースだと思っています。こうした新しいネットワークを活かしながら、日本国内における既存のESD に取り組む皆様とも連携・協力をさせていただき、今後のESD活動を推進していきたいと考えています。

11月10日～12日
「ESDに関するユネスコ世界会議」開催に向けたあいち・なごやの受け入れ準備状況の紹介

吉田英生
ESDユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会
事務局長

愛知・名古屋では各国大臣等による閣僚級会合と、各国政府関係者などによる全体会合、分科会などが行われる予定です。世界会議終了後には国内関係者によるフォローアップ会合も開催されることになっています。この世界会議の開催に合わせて、地元として、ESD の取組をしている様々な団体が集い、交流し、発信する併催イベントの開催もしたいと考えています。また、将来の持続可能な社会づくりの担い手である子どもたち、小・中学生が中心となって現地学習を行い、グループ討議を経て学んだ成果を発表するESD 子ども会議の開催も予定しているところです。この世界会議の開催を支援するため、愛知県と名古屋市が中心となり、国の関係省庁、地元経済界、教育関係の機関など幅広い関係者により支援実行委員会を設立し、2013年4月には地元としての取組をまとめた開催支援計画を公表しました。会議支援、愛知・名古屋の魅力発信、ESD の普及促進、ESDの取組促進、という4つの柱を立て、地元が一丸となって準備を進めているところです。そのうち、ESD の普及啓発としては、あらゆる機会を捉えて県内各地でのイベントを開催するなどしてESD、そしてユネスコ世界会議のPR をし、開催機運の盛り上げを図っています。また、ESDの取組促進としては、多様な主体によるESD の実践を促進するパートナーシップ事業の展開や、愛知県主催で市町村向けのESDセミナーも開催しているところです。愛知県ではユネスコスクールの加盟数増加など、ESDの取組の輪が着実に広がってきています。これからもこうした取組の手を緩めることなく、ESD の促進を図るとともに、これまでの経験を活かしながら国際会議開催に向けて万全の準備を進めていきたいと考えています。

3分科会まとめ

日本でESDがもっと広まるために。3つの視点で分科会を構成し、参加型討議を実施しました。

分科会①

地域のガバナンスを徹底的に高める

地方自治体の役割認識を高め、地域を中心にした産官学・市民の連帯を強化する仕組みづくりの重要性を明らかにするため、様々なケーススタディから学びます。

コーディネーター	阿部　治	立教大学教授・ESD研究所長、日本環境教育学会会長、ESD-J代表理事、「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム代表理事
ゲスト	内藤元久	岡山市ESD世界会議推進局 審議監
	稲本隆壽	愛媛県内子町長
	中室雄俊	奈良市教育委員会 教育長
	千葉正法	稲城市教育委員会 教育部 参事 指導室長
	三隅佳子	北九州ESD協議会　副代表

《各地域のESD取組の特徴と今後の課題》

【奈良市】
▷奈良の文化財は、先人の知恵と努力で残ってきた。「なぜ先人は残そうとしてきたのか」という願いと想いと知恵を学ぶことが、世界遺産学習の特徴。
▷奈良だけでなく全国に広げるための「全国サミット」を開催。
▷自治体と学校が参加する「世界遺産学習連絡協議会」のネットワーク化を、教育委員会の新しいイニシアティブとして促進。
▶これからの課題は、「推進人材の育成」「ネットワークの拡大」「保護者・市民への啓発」

【岡山市】
▷公民館を拠点に、環境保全と国際理解の社会教育活動推進の伝統。
▷「ESDウイーク」と「ユネスコスクール」の戦略的取組。
▷地域全体でESDに取り組むための、岡山ESD推進協議会の構築。
▷大学、市役所、公民館の中核支援連携がESD推進のパワー。
▶これからの課題は、防災、健康福祉、社会的公正、街づくりに活かし広げる事。

【多摩市・稲城市】
▷少子高齢化のスピードが著しい多摩市と人口増の自然と利便の両立した稲城市は、持続可能な地域づくりに取り組む視点としてESDに注目。
▷「2050年の大人づくり」をテーマに公立小中学校の全てでユネスコスクール運動に取り組む。(地域における学校のソーシャルキャピタル化)
▷市役所と教育委員会が連携して、ESDで学校や地域を変えていく。学校は、「点から線のESDへ」。自治体は、「線から面のESDへ」
▶これからの課題は、学びが実社会や現実社会の課題に直結している事を踏まえて、子供達の立場に立ちながら推進する仕組みを強化する事。

【内子町】
▷町と町長が、「町並み、村並、山並みが美しい持続的に発展する町」の目標を定める。
▷生涯学習テーマとして、歴史的町並み保存運動に住民参加で取り組む。
▷41自治会で、住民参加による「地域づくり計画書」策定に取組み、各地区の「自治センター」を起点に推進している。
▶これからの課題は、行政職員の気持ちの継続と、無理せず持続的な住民参加システムの継続を実現出来るか。

《パネルデスカッションで出た重要ポイント》

■ESDは、持続可能な地域や社会を構築するための、多様な主体における人材育成のシステム。学校教育を始め生涯学習、企業人育成など、幅広い主体への対応と、幅広い教育機会を総合的に組み込む「地域ガバナンス」が重要。
■持続可能な地域や社会づくりのキーは、普段の私達の身近な日常に存在している。特に、市民や地域住民と直結している基礎的自治体のイニシアティブは極めて重要で、ESDの推進における多主体連携と協働推進のシステムづくりが鍵。
■地域を構成する多様な主体が、持続可能な地域づくりのプレイヤーであると同時に、「地域ガバナンス」の重要な主体の一人であるという「オーナーシップ」意識を持つことがESDの重要なポイント。
■持続可能な地域や社会を創る人材育成がESDであるため、「無理なく、楽しく、カッコ良く」何時までも続けられる創意工夫が求められる。持続可能な未来と夢を持ったビジョンの共有と、多主体による共育・協働システム構築が大切。
■ポスト2014におけるESD推進のキーとして、「地域ガバナンス」の重要性と有効なシステム作りを引き続き検討し、最終年会合への提言として組み立てる。

【北九州市】
▷女性達が主体で始まった公害防止運動「青空が欲しい運動」の伝統を活かして、住民参加によるESDを推進。
▷「北九州ESD協議会」を設立して、「ビジョン」と「6つの要素」を共有。
▷「地域ネット」「広報」「調査研究」「ユース」の4つのプロジェクトを推進。市内10大学と連携して「まなびとESDセンター」を設立。
▶これからの課題は、企業との連携を図る事、行政との連携を強化する事、地域へ広げる事。

分科会②

ESD教材のアーカイブス化を積極的に進める

ESDの普及のための、誰もが簡単に活用できる様な「教材等のアーカイブス化」に向けて、優れた教材づくりと全国的なアーカイブス・センター化の仕組みを考えます。

コーディネーター	川嶋　直	公益社団法人日本環境教育フォーラム常務理事、「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム理事
ゲスト	丸山高弘	特定非営利活動法人地域資料デジタル化研究会 副理事長、山中湖情報創造館 指定管理者館長
	佐藤真久	東京都市大学 准教授
	水野雅弘	株式会社TREE 代表取締役、Green TV Japan ファウンダー プロデューサー、一般社団法人グリーンエデュケーション 代表理事
	小梶　嗣	朝日新聞広告局メディアプランニング 部長

■誰のためのアーカイブス化なのか
まずは、「学びの場を提供する人たち」に向け、わかりやすく言えば教育者向けのアーカイブスが求められている。勿論、子供に対する教育を考えれば全ての親は教育者ではあるが、ここでは公教育・社会教育などで組織的に教育を仕掛ける側を対象者として考え、次の段階で誰でも使えるアーカイブスに発展してゆく姿を考えたい。

■誰がこの作業をするのか
キーワードは「図書館」。そもそも様々な資料の収集と提供の役割を担う図書館こそESD教材の収集と提供の役割を果たすべき装置ではないか。実際にESDに積極的に取り組んでいる岡山市の各図書館では「ESDコーナー」を設置し、「ESDブックリスト」の提供も行っている。地域の図書館のこうした働きと共に国レベルの仕組みとして、全国で活用できる「ネット上にある開架の学級文庫」の提案があった。更に「国際ESD図書館(International ESD Library and Learning Center)」のようなものを設立して、世界中のESD教材の収拾と提供の任を担っても良いのではないかという提案もあった。

■すでにあるものを使う
ESD教材に関係する教材リストは、環境教育、開発教育などの分野別にすでに何箇所かで作られている。こうしたリストを活かして、その統合を進めながら新たな情報を集めることが「ESD教材のアーカイブス化」に必要なこと。

■アクセシビリティのよいものを
集まった教材を「整理し、体系化し、見やすい状態にする」作業が不可欠だ。アクセスする人が容易に教材に辿り着けるような編集機能を持った体制作りが必要。

■使われるアーカイブスにするために
ESDは参加型の学びであり、教材の「使い方」によって、ESD的になる場合もならない場合もある。したがって、使い方とともに教材が普及していくことが望ましい。教材の利用者がどんどん活用報告を載せていく「クックパッド」のようなものができないだろうか。また、季節や時事問題とリンクして「オリンピックをテーマにこんな教材がありますよ」「防災の日に絡めて、こんな教材つかってみませんか?」といったメールが届くシステムがあるとよい。

■ドイツのESDポータルサイト
おそらく私達が「ESD教材のアーカイブス化」を検討する時に、最も参考になるのがドイツの「ESDの10年ポータルサイト　http://www.bne-portal.de/」であろう。このポータルには様々な方法で検索可能なESD教材が多数アップされている。重要な点は毎年決められたテーマ毎にそのテーマに関する教材を集中的に集め、精査し、公開している点。

■MOOCs(ムークス:Massive Open Online Courses)などのオンライン教育も横目に見ながら
最近注目を集めている「カーン・アカデミー」などは短時間のビデオ教材を数千本ウェブ上に公開している。講義はウェブの教材ビデオを使い自宅で学び、教室では「質問する」「教え合う」「議論する」など、教室に集まったならではの授業を行う「反転授業」という試みも各国に広がっている。こうした教育のあり方そのもののパラダイムシフト状況を横目に見ながら、ESD教材の利用のあり方も検討されるべきであろう。

このほか「アーカイブスという表現」「教材の品質保証」「教材の著作権」等の問題意識も提示された。

分科会③

優れた実践を みんなで積極的にほめる

国などの公的団体、マスコミや民間企業、更には市民団体が幅広く協働して、
ESDの「良いプロジェクトに光を当てる」「良いプロジェクトを褒める」活動を持続的に構築することについて議論しました。

コーディネーター	福井昌平　株式会社コミュニケーション･デザイニング研究所代表、「ESDの10年･世界の祭典」推進フォーラム理事兼任事務局長
ゲスト	福井光彦　独立行政法人環境再生保全機構 理事長
	齊藤英行　株式会社教育新聞社 取締役編集局長
	川廷昌弘　CEPAジャパン代表
	高平　亮　岡山県ボランティア･ＮＰＯ活動支援センター「ゆうあいセンター」所長

討議テーマ

1）ESD推進における、「ほめる文化」の意義。（功罪を踏まえて）
2）ESD推進における、「ほめるシステム」へのアプローチ。
3）ESD「ほめるシステム」の構築。（地球市民会議からの提言）

- ほめる事例①　**地球環境基金**　20周年の総括から
- ほめる事例②　**ESD大賞**　教育現場にほめる仕組みを
- ほめる事例③　**生物多様性アクション大賞**　日常生活の中に生物多様性行動を誘発する
- ほめる事例④　**復興支援岡山高校生アワード**　「頑張った子供をほめる」という大人の役割

基調講演者･クリスト教授のコメント

4名のゲストの報告を聞いていて、ドイツのESD推進に関する真剣な議論と、とてもよく似ていると感心した。

「ほめる」事を通じて、どの様なメッセージを社会に発信して行くのかという事が、極めて大切である。「ほめる」側の責務が問われている。

参加者からの声

▷「ほめる」事が、自己目的化されてしまう危険性がある。自己目的化されると良くない。
▷「ほめる」事が、功利性に結びついて欲しくない。「賞」が功利性に結びつきやすい傾向がある。
▷「ほめる」とは、「その方向でいいよ」と背中を押す事だ。海外で使われている、エンカレッジやエンパワーメントに近い。
▷「ほめる」とは、一方的なものでなく、皆で共有するという、フォローを伴うものである。

まとめ

1. 皆で「共有」すべき、「学ぶ」べき、グッドプラクティスやベストプラクティスを評価するプロセスの中で、「ほめる」仕組みや文化を創造する事が大切である。
2. これからの「ほめる」システムづくりは、①ESD実践の内発性と持続性を高める、②皆で共有する仕組みを持つ、③しかも教育としての普遍性とメッセージ性を持つ。
3. 本日をスタートにして、ポスト2014を展望した「優れた実践を、積極的にほめる」仕組みを構想し、広く関係者に参加を呼びかけながら、最終年会合への提言として組み立てる事とする。

フロアからの声

参加者の皆様から様々な御意見をいただきました。

- 良い首長・良い議員を選ぶのは良い市民。⇒**良い市民**をどうやって育てていくのかということが、ESDであり、**グローバルシチズンシップ**である。
- **社会教育施設**としての、公民館、図書館、博物館の役割の見直し。
- **高等教育機関**がESDにどう貢献できるのかをしっかりと考えるべき。
- 既存の価値観を問い直す⇔**先人の知恵やローカル知の見直し・掘り起こし**。どちらもESD。
- 経験則でやってきたことの**理論化・深化**をそろそろすべき。
- ESDにおいては“熱意”や“情熱”だけでなく、これからは**「政策」と「科学・研究」のリンク**も重要。
- ESDやユネスコスクールをやっていくことによって、学校が**地域**に開いていくべき。**地域**が子供を育てていくことの効果。
- 社会教育を含めて、全ての分野での人づくりには、**地域社会**が非常に重要。
- **ESDの情報収集と発信の拠点**が必要。国際ESD 図書館やラーニングセンターなどを検討してみることで、何が必要なのか整理ができるのでは。
- エネルギー問題や経済問題など**「持続不可能な在り方」をいかに変えていくか**という視点がESDにはもっと必要。
- 推進してきた施策をうまくつなげ、これからESD を始めたいと思う人たちに、**「ここに来たらESDの全てがわかる」ような場所・仕組み**が必要。
- 持続可能な社会を実現するための具体的な目標を立てることの重要性
⇒政策として**「ESDの評価」**が必要。
- **グローバル・アクション・プログラム･･･**5つの優先目標はその相互関係を明らかにして、有効に活用していくことが大切。それぞれについて、何らかの指標を作って評価していくことによってフォローアップの機能を持つことの重要性。
- ポストMDGｓにおけるESDの役割を考えると、環境問題だけでなく、**開発教育や防災教育も重要**になってくる。途上国もESDに関心を持っている。